

スポーツによる坐骨結節裂離骨折の検討

公益財団法人 スポーツ医・科学研究所

熊澤雅樹 横江清司

医療法人承継会 井戸田整形外科名駅スポーツクリニック

亀山 泰

【目的】

坐骨結節裂離骨折は診断の遅れなどからスポーツ復帰に支障をきたしたり、筋力低下が残存したという報告が散見される。本研究では当施設での坐骨結節裂離骨折例の臨床的特徴及び転帰を調査、検討することを目的とした。

【対象と方法】

対象は当所にて坐骨結節裂離骨折と診断された9例で、検討項目は発症時年齢、性別、発症から当所を受診するまでの期間、競技種目、発症動作、治療法、ジョギング再開時期、競技復帰の可否、競技復帰時期、残存症状、骨癒合の有無、骨癒合時期とした。

【結果】

発症時年齢は平均 14.3 歳、男性 5 例、女性 4 例であった。発症から受診までの平均は 8.3 週で競技種目はサッカー、陸上、バドミントンが各 2 例、野球、ラグビー、器械体操が各 1 例であった。発症動作はダッシュが 5 例、前方への踏み込み動作が 3 例であった。治療は全例保存療法を行い、平均 8.5 週でジョギング再開、競技復帰は 5 例（平均 5.8 か月）で可能であった。残存症状としては運動時の殿部違和感や練習後の殿部痛、ハムストリングスの筋力低下などを認めた。骨癒合に関してはレントゲンで確認できたのは 2 例であり 2 例は偽関節であり残り 5 例は不明であった。

【考察】

坐骨結節裂離骨折の治療として保存療法を基本とするが骨片の大きさや転位の大きさなどにより観血的治療も勧められている。

本研究では競技復帰まで追跡可能であったのは 9 例中 5 例であり骨癒合が得られたのは 2 例のみであった。骨癒合が得られにくく競技復帰に支障をきたすことがあり早期の診断と適切な治療法の選択が重要と思われた。